

国語

注意

- 1 問題は **1** から **5** までで、15 ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読んではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆(シャープペンシルも可)を使って明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、や。や。やなどもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の○の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 工場が立ち退いた跡地が公園になる。
- (2) 脊椎の仕組みや働きを学ぶ。
- (3) 生活が放恣に流れる。
- (4) もう少し鉄面皮であれば良かった。
- (5) 丁丁発止の議論が行われる。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 傘立てのアタリを探す。
- (2) 長期化するのはヒッシだ。
- (3) 大将がゾウヒヨウに号令する。
- (4) 街道に等間隔でリテイヒヨウが立つ。
- (5) 初対面でイキトウゴウする。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印のついている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

「私、チャオ*と暮らし始めてつくづく思うの。」

チャオをなでながら、美弥子^{みやこ}は続けた。

「与えるだけじゃなくて、受け取ることも愛情なのよね。相手を信頼して、ただ甘えるっていう。大人になればなるほど、そっちのほうが難しくなるんだけど。」

ふと、美弥子が顔を上げる。

「ねえ、今からお母さんのところに行かない？」

「今から？」

午後八時過ぎだ。まだ寝てはいないだろうが、これまでそんな行き来もなかったのにそれは突然すぎる。

「お互い好きにすればいいって、お母さん、言ったんでしょ。だったから私、好きにさせてもらおうわ。」

美弥子は俺を見つめた。

「お母さんに会いたい。今すぐに。」

その目は凜^{りん}と輝いて何の濁りもない。俺の心も呼び覚まされたように動き出した。

「……わかった。」

俺はがぶりと茶を飲んで答える。

「俺も、好きにする。」

サンライズ・クリーニングの前に着くと、俺たちは裏口に回った。二階の電気はまだついてる。

鍵は持っているので入ることはできたが、一応、チャイムを鳴らした。母さんは二階から下りてきたのだろう、少し間があつて、ドアの向こ

うから「どちら様？」とぶっきらぼうな声がした。ドアに備わっているのぞき窓から見えるはずなのに、しらじらしい。

「俺だ。」

そう答えるとドアが開いて、母さんがしかめ面^{しかめづら}で現れた。

「俺様かね。何か忘れ物？」

「……まあ、そんなところだ。」

俺と美弥子の顔を交互に見たあと、母さんはドアから体を離れた。

「上がれ。」ということらしかった。

俺たちを居間に通すと、母さんはこたつに足を入れた。

テレビではニュース番組をやっていた。

「ちよつと、天気予報だけ見せてよ。客足に響くんじゃね。」

(1) 俺と美弥子はなんとなくこたつに入れず、ソファに並んで腰かける。九時前のお天気コーナーがのんびりと流れた。明日の天気は曇り時々晴れ。朝晩は寒気の影響を受けて冷え込むので防寒対策を。

予報を終えた気象予報士が礼儀正しくお辞儀をするとすぐ、俺は単刀直入に言った。ストリートに切り出してしまわないと、最初の一步が進めない気がしたのだ。

「あんな、店を閉めるって話だけど。」

母さんは黙ったまま、テレビから目をそらさない。

「ほんとに、母さんはそれでいいのか。」

「……おまえには関係ないだろ。」

「でもそうやって客足気にして、店のことを考えてるじゃないか。」

「そりゃ、明日はまだ営業するし。」

「なあ、母さんがよければ、俺たち……。」

「いいんだ！ 店にはもう立ちたくない！」

遮るようにそう叫び、母さんはリモコンでテレビを消した。

そしてこらえきれなくなつたように声を震わせる。

「こんな老いぼれた自分なんて……こんな弱つた自分なんて、お客さんたちに見せたくないんだよ。」

母さんが。

(2) 母さんが、小さく小さく見える。

俺は思わず立ち上がつて母さんのそばに駆け寄りそうになつた。でもできなかった。はねのけられるのが怖いのは、俺も同じだった。

一瞬静まつた部屋の中で、美弥子が口を開いた。

「違うわ。」

張りつめていた空気に、切り込みが入る。

「お母さんの弱さはそこじゃないでしょう。」

母さんがびくりと眉を動かす。美弥子は静かだけれど強い声で続けた。

「お母さんの弱さは年齢のことでも体がしんどいことでもなくて、いいかつこしようとして、つらいとか寂しいとか言えないところでしよう。」

意表を突かれた。

美弥子のきつぱりとした物言いに。

母さんは戸惑つた様子を見せながらも、口を失^{とが}らせる。

「そんなにズカズカと人の心の中に入ってくるんじゃないよ。」

「ズカズカ行きますよ。お母さんとはもう長いつきあいなんですから。」

長いつきあい？

俺はきょとんとしたが、母さんはこたつテーブルの隅に視線を落とし、ふーっと大きなため息をついた。

「……まあ、そうだね。」

そして何かをあきらめたように笑った。

そうだね？

どうなってるんだ？

「あんたたちが結婚してから、月に一度ぐらいのペースですつとだもんね。」

美弥子さんがシャツだの毛布だの持つて、うちの店に来るの。」

(3) 美弥子は穏やかにほほえむ。

……知らなかった。

結婚してからということは、もう二十年超えた。

美弥子には何も言わず、電車に乗つてまでこの店に来てたのか？

母さんの様子を見るために、関係をつなげるために、洗濯物を持つて。そこでひらめくように思い当たつた。

俺が手掛けた創刊号からの『ラフター』*。知らせたのは、美弥子か。

「客だからね。邪険にはできないよ。」

母さんは苦笑いしながら額に手を当てた。

俺は……俺は二十年もの間ずつと、サンライズ・クリーニングできれいになつたシャツを着て、ふかふかになつた毛布で眠つていたのか。

「私、たくさんいる常連客のひとりですからね。」

美弥子が笑う。

母さんは少し視線を遠くに投げ、野良猫^{のらねこ}を見ていたときと同じようなやわらかい表情を浮かべた。これまで店に通つてきてくれた客たちのことを思い出しているようだった。

「仕事っていうのはね、合つた場所が続けていると、お金のやり取りだけじゃない何かが生まれるんだ。人と人が紡^{つむ}ぐものがある。会えること、話せること自体が嬉^{うれ}しくなつて、あるところまでいくと、お金じゃないってなるんだ。……なじみの顔が増えて、この店は毎日開いてるから助かるよ、おばあちゃんがいつでもいてくれて頼もしいよって言われて、そのおかげですつとがんばれたんだ。あたしはいつもここで元気にしていなくちゃつて、自分がどこまでやれるかチャレンジするような気持ちだつたのかもしれない。」

母さんは、肩を少しすくませた。

「でもだからこそね、まだ体が動く今のうちに去るのも悪くないんじゃない？」

ないかっと思ったんだよ。みんなの記憶の中で、元氣なあたしのまんま。確かにあたしは、いいかっこしたかったんだろうね。」

そこまで言うのと、母さんはうつむいた。

「でもやつぱりもう、潮時だよ。こんなに好きな仕事をつらいと思うことがつらい。」

美弥子は、壁のフックに掛けられている母さんの上着に少し目をやった。葉っぱの刺繡ししゅうが施された、グレーのコートだ。

「ねえ、お母さん。チャレンジもすごいことだけど、アレンジも素晴らしいんじゃないかしら。」

「え?」

「ずっと同じじゃなくて、少しずつ手を加えて前よりもっと良いものにするの。まず、定休日を作りましょう。八十代だって二十代だって同じ、あたりまえのことです。しっかり働くために、しっかり休まないといけない。」

母さんが、叱られた子どものように下唇をぷつくりと突き出す。でもそこには、安堵あんどの匂いも漂っていた。

「それから……私の手をお貸ししますので使ってください。お店でも、おうちでも。」

美弥子はそっと、片腕を掲げる。

⁽⁴⁾ 母さんが俺を見上げた。様子をうかがうようにして。俺はただ、大きくうなずく。

受け取ってくれ、母さん。

俺たちの気持ち。

それが今、俺が求める母さんの愛情だから。

母さんから、ふっと笑みがこぼれる。

「……美弥子さんの手、猫ほど役に立つかね。」

相変わらずの憎まれ口だ。しかしその目の縁は、わずかに濡ぬれていた。

美弥子は「尽力します。」と笑ったあと、すっきりとこう言った。
「大丈夫です。少し休めばお母さんはまた、必ず店に立ちたくなくなりますから。」

(青山美智子「リカバリー・カバヒコ」による)

〔注〕チャオ——飼っている猫の名前。

『ラフター』——作品中に登場する雑誌名。

〔問1〕⁽¹⁾ 俺と美弥子はなんとなくこたつに入れず、ソファに並んで腰かける。とあるが、このときの「俺」と美弥子の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 自分たちが夜訪問したことに母さんが腹を立てているのを見て、忘れ物の話を切り出せず、気まづくなっている様子。

イ 美弥子が母さんに会いたいと強く言ったので訪問したのに、その気持ちを母さんに理解されず切なく思っている様子。

ウ 自分たちも急な夜の訪問を非常識な行動だと思っはいたが、母さんにあからさまに嫌な顔をされて、後悔する様子。

エ 意を決して訪問したものの母さんに無愛想な応対をされ、気が引けて気安く振る舞うことが遠慮されている様子。

〔問2〕⁽²⁾ 母さんが、小さく小さく見える。とあるが、このときの「俺」の心情を五十文字以内で書け。

〔問3〕⁽³⁾ 美弥子は穏やかにほほえむ。とあるが、なぜ美弥子はこのようにほほえんだのか。その理由として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 長い間店に通う常連客に対して母さんが態度を和らげたのを見て、満足しているから。

イ 結婚以来ずっと店に通っていたことを知って俺が驚いた様子を見て、得意になっているから。

ウ 長い間店に通い続けたことを認められ、母さんとのつながりの強さを改めて実感したから。

エ 結婚以来電車に乗ってまで通い続けた苦勞を思い、偉いのは自分だと納得しているから。

〔問4〕⁽⁴⁾ 母さんが俺を見上げた。とあるが、このときの母さんの心情として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 美弥子の言葉に励まされ、もう少し自分で頑張った方が良いか息子に意見を求めたい気持ち。

イ 美弥子の言葉通り、店を続けるために家族に頼ってもいいのか迷いながらも確認したい気持ち。

ウ 美弥子の言葉は嬉しいが、店の仕事を不慣れな二人に任せられるの不安に思う気持ち。

エ 美弥子の言葉に対して、疎遠だった息子が店に関わってくれるはずがないと疑う気持ち。

〔問5〕 本文の表現を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 特定の語り手によって語られ、事実が新たに判明するかたちで物語が展開していく構成になっている。

イ 登場人物の言葉遣いを敬体と常体とに分けることで、それぞれに係の上下があることを示している。

ウ カタカナ語を多用することで、舞台となる店に都会的な雰囲気が漂っていることを暗示している。

エ 倒置法を多用することで、登場人物それぞれの心情が揺れ動いて定まらないことを強調している。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印のついている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

社会の理想的なあり方を構想する仕方の発想の二つの様式は、こんにち対立するもののように現れているが、たがいに相補するものとして考えておくことができる。一方は美しく欲びに充ちた関係のユートピアたちを多彩に構想し、他方はこのようなユートピアたちが、それを望まない人たちにまで強いられる抑圧に転化することを警戒し、予防するルールのシステムを設計する。⁽¹⁾両者の構想者たちの間には、ほとんど「物質的」とさえ感じられる反発が火花を散らすことがあるが、一方のない他方は空虚なものであり、他方のない一方は危険なものである。それはこのような社会の構想の課題の二重性が、人間にとつての他者の、原始的な両義性に対応しているからである。

〔他者の両義性〕の内、生きるということの意味と欲びの源泉である限りの他者と、生きるということの困難と制約の源泉である限りの他者とは、その圏域を異にしている。圏域を異にしているということの単純な認識が、社会構想の理論にとつて、実質上決定的な意味を持つ前提である。たとえば二〇世紀を賭けた「コミュニズム」という巨大な実験の破綻は、この圏域の異なりに無自覚であったということに起因するとさえいってよいものである。全域的ではありえないものの美しい夢を、全域的であるもののように、ありうるもののように、あるべきもののように、あるはずのもののように、幻想した自己欺瞞の内にあったとさえいってよいものである。

「人はどれだけの土地を必要とするか」というロシアの童話があるが、人はどれだけの関係を必要とするかということを、わたしたちは問うてみることができる。他者のない生は空虚であり、先にみたように、一切の他者の死滅した後にはただ一人永遠の生を享受する生は、ほとんど永劫

の死と変わりのないものであるが、この生が生きるということの意味を取り戻し、欲びに充ちた生涯であるためにさえ、他者はたとえば、数人で充分であるということもできる。わたしの思考実験では、極限の場合、激しい相互的な愛が存在している限り、この他者は一人であっても、なお永劫の生を意味づけるに足るものである。対をもつて最小となすというアルセストみたいな思考には批判があるかもしれないし、わたしもこの点に理論上固執するつもりはないが、最大限に考えて数十人という、純粹に愛し合う人びとに囲まれた生が、欲びに充ちた生であることにとつて、なお不足があるというよくばりな人は、少ないと思う。

もちろんわれわれは現実の構造の中で、幾万人、幾百万人、幾億人という他者たちなしには、生きていけない。現代日本の都市に住む平均的な階層の一人の人間を考えてみれば、食料を生産する国内・国外の農民たち、牧畜者たち、石油を産出する国々の労働者たち、これら幾億の他者たちの存在なしには、一つの冬を越すことも困難である。⁽²⁾この意味で人は、幾億の他者たちを「必要としている」ということもできる。けれどもこのような、生存の条件の支え手としての他者たちの必要ならば、それは他者たちの労働や能力や機能の必要ということであって、何か純粹に魔法の力のようなものによって、あるいは純粹に機械の力か、自然の力等々によって、それが充分に供給されることがあればよいというものであり、この他者が他者でなければならぬというものではない。つまり他の人間的な主体でなければならぬというものではない。他者が他者として、純粹に生きていることの意味や欲びの源泉である限りの他者は、その圏域を事実的に限定されている。

⁽³⁾これに対して、他者の両義性の内、生きるということの困難と制約の源泉としての他者の圏域は、必ず社会の全域をおおうものである。

現代のように、たとえば石油の産出国の労働者たちの仕事にわれわれ

の生が依存し、またわれわれの生のかたちが、フロンガスの排出等々をとおして、南半球の人びとの生の困難や制約をさえ帰結してしまうことのある世界にあつては、このような他者との関係のルール、の構想は、国家や大陸という圏域の内部にさえ限定されることができない。たとえば一国の内域的な社会の幸福を、他の大陸や、同じ大陸の他の諸地域の人びとの不幸を帰結するような仕方では構想することはできない。つまりわれわれの社会の構想の二重の課題は、関係の射程の圏域を異にしている。

生きることの意味と欲びの源泉としての他者との関係のユートピアの構想の外部に、あるいは正確には、無数の関係のユートピアたちの相互、関係の構想として、生きることの相互の制約と困難の源泉でもある他者との、関係のルールの構想という課題の全域性はある。圧縮すれば、われわれの社会の構想の形式は、

〈関係のユートピア・間・関係のルール〉

という重層性として、いったんは定式化しておくことができる。

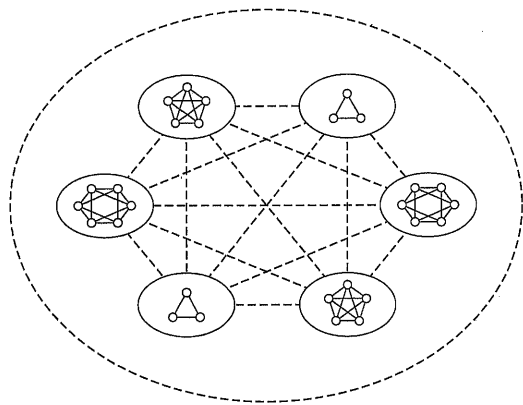


図1 〈モデル0〉

あるいはこれを、極限にまで単純化された〈モデル0〉ともいふべきものとして視覚化するなら、次のように、いったんは図示しておくことができる。(図1)

〈関係のユートピア〉と仮に名づけておくものの内部、他者たちは、交歓する他者たちである。図の実線は、〈交歓〉という関係のモードを表現する。この交歓する他者たちの圏域の外部、他者たちとの関係は、相互に

その生き方の自由を尊重し侵さないための協定 agreement を結び、このような自由を保証するための、最小限度に必要な相互の制約のルールのシステムを明確化する。図の点線は、このような〈尊重〉という関係のモードを表現する。つまりわれわれの社会の理想像において、すべての他者たちは相互に、

〈交歓する他者〉 and/or 〈尊重する他者〉

として関わる。

関係のこの二つの基本的なモードは、われわれの社会の構想が、〈他者の両義性〉のそれぞれの位相に対応する仕方である。

(4) この〈尊重する他者〉たちの相互の協定とルールのシステムは、社会の理念史としてよく知られているコンセプトでいえば、「契約」の関係である。いいかえれば、われわれの社会構想の内、全域的なフレームを構成する原理の形式は、近代の〈市民社会〉の理念のエッセンスといふべきものと、基本的に同じものである。もともと〈市民社会〉の理念と形式は、古代の最初の成熟した「都市国家」の試み以来(ソロン/ペイシストラトス/クレイステネス/等々)、〈共同体・間・関係〉の、つまり外部性としての他者たちの相互の関係の処理の形式の普遍性として、現代に至る経験の全歴史の内に蓄積し、精錬し、展開し、具体化されてきたものであり、われわれはこれを、われわれのユートピアたちの、豊饒と多彩と自由とを相互に保証する形式として、方法的に選択し、編集し、活用してゆくことのできるものである。われわれの社会構想に、近代的な市民社会の理論と異なるところがあるとすれば、それはその社会の形式においてではなく、この形式のエッセンスを方法として、希求する夢の実質の内にあるだろう。

これに対して、われわれの社会構想の構成の二重性の内、積極的な実質のユニットを構成している、〈交歓する他者〉たちの関係のユートピアというコンセプトは、社会の理念史の内、知られているコンセプトと

の対応でいえば、「コミューン」*という経験のエッセンスを確保しながら、個の自由という原理を明確に優先するということを基軸に、批判的な転回を行なおうとするコンセプトである。

この批判的な転回は、核となる論点なのであえてくりかえして展開すれば、社会のこれまでの理念史の内の「コミューン」という名称のほとんどが強調してきた、「連帯」や「結合」や「友愛」ということよりも以前に、個々人の「自由」を優先する第一義として前提し、この上に立つ交歓だけを望ましいものとして追求することである。このことの系として、それは個人たちの同質性でなく、反対に個人たちの異質性をこそ、積極的に享受するものである。サルトルが、他の点では学ぶべきことの多いその社会理論の力業（『弁証法的理性批判』）において提示した、「溶融集団」——そこでは他者の他者性は溶融するという——とは反対に、他者の他者性が相互に享受される関係の圏域である。われわれにとって好ましいものである限りの「コミューン」は、異質な諸個人が自由に交響するその限りにおいて、事実に存立する関係の呼応空間である。

（見田宗介「社会学入門」（一部改変）による）

〔注〕 ユートピア——理想郷。

コミュニズム——私有財産制を否定する思想。

アルセスト——フランスの戯曲中の主人公。

位相——ある世界や社会などの中でどういう位置にあるかということ。

こと。

ソロン／ペイシストラトス／クレイステネス——古代ギリシャの

政治家。

コミューン——最小行政区域・共同体。

サルトル——フランスの哲学者。

〔問1〕⁽¹⁾ 両者の構想者たちの間には、ほとんど「体質的」とさえ感じられる反発が火花を散らすことがあるが、一方のない他方は空虚なものであり、他方のない一方は危険なものである。とあるが、「一方のない他方は空虚なものであり、他方のない一方は危険なものである。」と言うのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選ぶ。

ア ルールによって他者とつながることでは欲びは得られず、つながりの欲びを求めるだけではルールと対立してしまつから。

イ 他者とつながる欲びだけでは空しく、他者とつながるルールが行きすぎると人々を抑圧するばかりになるから。

ウ 他者とつながる欲びがないのは空しく、望まないつながりの強制を防ぐルールがないと害を被ることになるから。

エ ルールだけで他者とのつながりを規制することはできず、ルールなしでは他者とのつながる欲びを維持できないから。

〔問2〕⁽²⁾ この意味で人は、幾億の他者たちを「必要としている」ということもできる。とあるが、どういふことか。次のうちから最も適切なものを選ぶ。

ア 人は、個人の安全で快適な生活のために必要な社会を作ってくれる、尊重する他者が必要としているということ。

イ 人は、個人が主体として生きるために必要な、共に生きる欲びを分かち合う相手が必要としているということ。

ウ 人は、個人の生きる意味や欲びのために必要なシステムを作ってくれる、社会的存在を必要としているということ。

エ 人は、個人が生きるために必要な条件を満たしてくれる、はたらかしとしての他者を必要としているということ。

〔問3〕⁽³⁾ これに対して、他者の両義性の内、生きるということの困難と制約の源泉としての他者の圏域は、必ず社会の全域をおおうものである。とあるが、このように言えるのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選ぶ。

ア 我々は他者と何らかの影響を与え合いながら生活しているが、現代社会においてはその範囲は固有の生活圏にとどまらないから。

イ 我々は共に生きる欲びを他者と与え合いながら生きているが、現代社会においてはそれが生きる困難にもつながりかねないから。

ウ 現代社会において意図するとならないに関わらず、我々の在り方や行動の結果は最終的に自分たちに還元されるものであるから。

エ 我々は生きていく上で他者との関係を維持することの困難を感じているが、現代社会ではその他者は国際的になっているから。

〔問4〕⁽⁴⁾ この「尊重する他者」たちの相互の協定とルールのシステムは、社会の理念史としてよく知られているコンセプトでいえば、「契約」の関係である。とあるが、「『契約』の関係」とはどういう関係か。次のうちから最も適切なものを選ぶ。

ア 集団内において市民同士の利害が衝突した場合に、法的な取り決めに基づいて解決を図る関係。

イ 集団間の合意に基づいて互いに義務と責任を果たし合い、協調して集団を維持することを約束した関係。

ウ 集団内の個人が互いに制約と困難を与えることを回避するため、取り決めに基づいて牽制し合う関係。

エ 集団同士が相手の権利や自由を侵害することなく、対等に互いのあり方を尊重すると取り決める関係。

〔問5〕 この文章で筆者は、「他者（たち）」との関係の違いについて述べている。私たちは様々な集団に属し他者とながっているが、他者（たち）との関係において最も大切なことはどのようなことだとあなたは考えるか。具体的な集団を挙げて、あなたの考えを理由とともに、二百四十文字以内で書け。なお、や。や。「などのほか、書き出しや改行の際の空欄もそれぞれ字数に数えよ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印のついている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

日本には、光と影が織りなす美、幽玄の美があります。そのルーツをたどってみたいと思います。平安時代中期頃、荒廃した邸宅や庭園に人々が集まって、雑草が生い茂った景色を楽しみ、和歌を詠むという現象が起きました。例えば、河原院です。河原院は、源融が贅を尽くして造った邸宅で、在原業平たちが集い、文学が生まれる華やかな場でした。しかし、融の死後は、宇多法皇に献上され、幽霊が出る騒ぎや賀茂川の氾濫もあって、荒廃の一途をたどります。それが、平安時代中期になると、融の曾孫にあたる安法法師が住み、廃園を愛する風流人たちが寄り集い、再び詩歌が生まれる場となったのです。恵慶法師の歌を引いてみましょう。

*河原院にて、荒れたる宿に秋来るといふ心を、人々詠み侍りけるに

八重葎茂れる宿のさびしきに人こそ見えね秋は来にけり

〔『拾遺和歌集』秋・一四〇・恵慶法師〕

（幾重にも雑草が茂ったこの家は寂しいので、人は誰も訪れないけれども、秋だけは確かにやってきたのだった）

*河原院に、荒れたる宿の心、人々詠むに
すだきけむ昔の人もなき宿にただ影するは秋の夜の月

〔『恵慶集』八〇〕

（ここに集まったという昔の人もいない宿に、ただ姿を見せるのは、秋の月だけだなあ）

昔は栄華を誇り、大勢の人でにぎわったのに、今では訪れる人もいなくなつたこの場所に再び脚光が当てられたのです。「すだきけむ」の歌の「昔の人」は、源融の時代に河原院に集った業平たちです。恵慶は失われた華やかな時代を愛おしみながら、何もかも失われ、寂しく荒廃した邸をこよなく愛しました。⁽¹⁾寂しいこと、失われることがただマイナ

スなわけではないのです。消えゆくことを受け入れ、むしろそこに美を見出すという姿勢は、言い換えれば、老いや死の受容、肯定でもあります。負の美学とでも言いましょうか。

次の定家の歌も、無の世界を描ききっています。

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ

（『新古今和歌集』秋上・三六三・藤原定家）
（見渡すと花も紅葉も何もないなあ。海辺の苫葺きの小屋が点々と見える秋の夕暮れよ）

この歌は、後にわび茶の世界で重視されます。^{*たけのじやうおう}武野紹鷗のことばを引用しましょう。

花紅葉を知らぬ人の、初めより苫屋には生まれぬぞ。

〔『南方録』

（花紅葉を知らない人が、初めからいきなり苫屋に住むことはできない。）

苫屋は、花紅葉を知り尽くして初めてその良さがわかるといいうのです。荒廃した河原院の美も、過去に華やかだった時代があつてこそその魅力なのです。

恵慶たちによる廃園の美の発見は、日本中世の幽玄の美に受け継がれてゆきます。幽玄は日本を代表する美的理念です。もとは中国の仏典用語で、奥深く微妙で、簡単には知りがたいという意味を表すことばでした。

た。安易な理解を拒絶するような、神秘性を持つことばだったので。それが、和歌や連歌^{れんが}、能にも用いられるようになっていきます。和歌や能で言われる「幽玄」は、直接的な知覚によっては簡単に理解できない、未知の部分が多く残すことで、自由で豊かな想像を⁽²⁾かきたてるという方法です。明瞭よりは曖昧、単純よりは複雑、饒舌^{じょうぜつ}よりは寡黙、明暗でいえば薄暗さ、これが「幽玄」の世界です。⁽³⁾対象との「距離感」が非常に重要な要素です。時間的な距離、空間的な距離、心理的な距離、いずれにしてもある種の距離感がキーワードです。今すぐに触れられる、直接的に感知できるというのではなく、遠くから見つめる、あるいはここにはないものを想像するという生き方を志向します。この距離感がもたらす、心の活発な動き、これが幽玄の本質です。昔華やかだった場所に行き、荒廃しきった景色の彼方^{かなた}に消え去った往時を幻視するという恵慶たちの行為は、まさに幽玄のさがけです。

和歌における幽玄の例を引いてみましょう。⁽⁴⁾西行の歌です。

津の国の難波^{なには}の春は夢なれや葦^{あし}の枯葉に風渡るなり

〔新古今和歌集〕冬・六二五・西行

(能因^{*のういん}が見た、津の国の難波の春景色は夢だったのだろうか。葦の枯葉に風が吹き渡ってゆく)

第二・二句の「津の国の難波の春」は、能因の次の歌を指しています。

^{*}正月ばかりに津の国にはべりけるころ、人のもとにいひにつかはしける

心あらむ人に見せばや津の国の難波わたりの春のけしきを

〔後拾遺和歌集〕春上・四三・能因

(この感動を理解する人に見せたい。摂津^{せつづ}国の難波周辺の春の風景を)

⁽⁴⁾難波津(大阪湾)の春らんまんの風景を見て、あまりの感動に叫びだしそうになる衝動に駆られた歌です。しかし、西行が見た難波津は、荒涼とした冬枯れの景色でした。能因が見た春景色は「夢」だったのだろうか、と西行は言います。能因が見た色彩豊かな春らんまんの景色と、西行が見たモノクロの冬景色が、時を隔てて二重写しになっていきます。目の前の冬景色の彼方には失われた春の華やかな風景がイメージとして残されていて、ただの冬景色とは違った風景が浮かび上がってきます。^{*}藤原俊成はこの歌を「幽玄」と賞賛しました。⁽⁵⁾先の河原院の栄華がこの歌では能因が見た春景色に相当していて、幽玄が恵慶の歌の系譜上にあることは間違いないでしょう。

(谷知子「古典のすすめ」(一部改変)による)

〔注〕源融——平安初期の貴族。

在原業平——平安初期の歌人。

宇多法皇——第五九代天皇。

安法法師——平安中期の僧、歌人。

惠慶法師——平安中期の僧、歌人。

河原院にて、荒れたる宿に秋来るといふ心を、人々詠み侍りけるに

——河原院で、荒廃した宿に秋がやって来るといふ心を、人々

が歌に詠みましたときに。

河原院に、荒れたる宿の心、人々詠むに

——河原院で、荒廃した宿の心を人々が歌に詠むときに。

定家——藤原定家。鎌倉初期の歌人、歌学者、古典学者。

苦屋——苦葺きの粗末な小屋。

武野紹鷗——室町末期の茶人。

西行——平安末期・鎌倉初期の歌人、僧。

能因——平安中期の僧、歌人。

正月ばかりに津の国にはべりけるころ、人のもとにいひにつかはしける——正月頃に津の国におりましたころ、ある人のところに

言付けて遣わした歌。

モノクロ——単一の色彩。

藤原俊成——平安末期・鎌倉初期の歌人。

〔問1〕⁽¹⁾ 寂しいこと、失われることがただマイナスなわけではないのです。

とあるが、このように言えるのはなぜか。最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 雑草が生い茂るような荒涼とした景色は、貴族にとってなじみがなく、清新な美しさに気付かせるから。

イ かつての繁栄が失われ荒涼とした景色は、ものの移ろいを実感させ、そのはかなさに美を見出させるから。

ウ 荒廃した邸宅や庭園の景色は、幽霊のような神秘的な存在を感じさせ、幻想的な美を思わせるから。

エ かつての繁栄が失われ荒廃した景色は、秋の風や夜の月を引き立て、季節の美しさを一層印象付けるから。

〔問2〕⁽²⁾ かきたてるのここでの意味として最も適切なものを次のうちから選べ。

ア きわだたせる

イ ひけらかす

ウ わきあがらせる

エ せきたてる

〔問3〕⁽³⁾ 対象との「距離感」が非常に重要な要素です。とあるが、どう

いうことか。最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 幽玄の美は、奥深くはつきりとは感じ取れない対象をイメージしようとする心の動きが重要だということ。

イ 幽玄の美は、人間の安易な理解を超えた対象を眼前に再現しようとする心の動きが重要だということ。

ウ 幽玄の美は、中国の仏典用語の表す美的理念を日常の風景に見て取ろうとする心の動きが重要だということ。

エ 幽玄の美は、対象と積極的に距離を取り、曖昧になった部分に美を見ようとする心の動きが重要だということ。

〔問4〕⁽⁴⁾ 難波津（大阪湾）の春らんまんの風景を見て、あまりの感動に

叫びだしそうになる衝動に駆られた歌です。とあるが、「あまり

の感動に叫びだしそうになる衝動」は能因の歌ではどのように表現されているか。それにあたる部分を和歌の中から十字で抜き出せ。

〔問5〕⁽⁵⁾ 先の河原院の栄華がこの歌では能因が見た春景色に相当してい

て、幽玄が恵慶の歌の系譜上にあることは間違いないでしょう。

とあるが、「幽玄が恵慶の歌の系譜上にある」とはどういうことか。最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 現実の荒廃した景色を題材にして、それとは全く異なる華やかな景色のイメージを描いてみせたという点で、幽玄の歌の作り方は恵慶が創始したということ。

イ 眼前の荒涼とした景色の背後に、消えてしまったかつての華やかな景色を見て取ろうとする点で、幽玄という価値観は恵慶の歌が起点になっているということ。

ウ 失われてしまったものの美しさを、華やかな景色とともに歌に詠み込んだという点で、幽玄の負の美学を取り上げる姿勢が恵慶に初めて見られたということ。

エ 現在の荒涼とした景色と対比的に過去の華やかな景色を描写して見せるという点で、時空を自在に扱う幽玄の特徴は既に恵慶の歌に見て取れるということ。

